［翻訳］

# 資料：“C.M.S. Japan Quarterly” の日露戦争時[1]の慰問袋[2]と桃山中学校の報告

岩　男　久仁子[3]

本稿は、“C.M.S. Japan Quarterly” の1907年７月号に記載された日露戦争時に戦地に送られた慰問袋についてと、1910年７月号に記載された桃山中学校に関する報告書との翻訳である。

慰問袋

日露戦争の間、「慰問袋」という言葉は大阪のキリスト教徒の女性の間で、ありふれた言葉になった。誰もが最前線へ送られた数百個の慰問袋を作ったり、中身を入れたりするのに忙しそうに見えた。

日本人はこれまでに同情を示そうと、そして兵士たちを助けたり、慰めたりしたいと思っていて、彼らにとっても慰めになるものを最小の空間に詰めこみ、運ぶというこの計画を思いついた。

この袋にはいろんなものが入れられており、より心が浮き立つよう花の模様や自然を思わせる柄で、多大な労力をもって作られていて、それは、彼ら

---

[1] 2015年６月24日から11月17日まで桃山学院史料室　学院史料展示コーナーにて、平成27年度泉大津市・桃山学院大学連携事業　第２次世界大戦終結70年・日露戦争終結110年記念企画展「戦争が残したもの　もたらしたもの」を行い、“C.M.S. Japan Quarterly” に記載されている日露戦争関連記事を翻訳した。

[2] 日露戦争時、日本人矯風会が「慰問袋」と直訳。佐世保鎮守府司令長官宛に100個送った。流行語となった。時事新報　1904（明治37）年11月22日「同会に500余個の慰問袋の寄贈あり」。

[3] 桃山学院史料室　調査研究員。

がそのために戦う、彼らのふるさとの国を兵士の心に思い出させるだろう。

このバッグには以下のもののいくらかを含んでいる。新約聖書、聖歌の抜書き、キリスト教文学、キリスト教徒からの手紙、（彼らは大切に思っているものから離れているために、これらの手紙は、しばしば、何よりも思いやりを望む兵士たちに喜びを与える）ノート、鉛筆、ハンカチ、歯磨き粉、石鹸、特効薬。この中に手紙を同封した幾人かは、返事を受け取り、そこから文通が開始され、そして、戦争は終わると、交流が始まり、兵士がキリスト教徒になるといういくつかの事例に導かれるのだ。私たちの小さな娘は彼女がバッグに入れた手紙のうれしい返事を受け取った。その人は、“true way”について聞いたことがあり、そしてそれについてもっと学んでいると言っていた。

当然、戦争が終わったら、慰問袋の送付は止まる。彼らに対するすべての必要性は、明らかに途絶える。しかしながら、数か月後、YMCA で、満州の病院にいる兵士たちに送られるための慰問品の計画が呼びかけられた。これらの兵士たちは、鉄道の監視をするために、そこに留まって、そして主に厳しい寒さが原因で病気にかかっていた。

大阪の外国人女性は、満州の７つの病院にそれぞれ入院患者の平均である100個の慰問袋を支給するために団結した。聖書協会は700冊の聖書を与えた、そして慰問袋がYMCAで働いている人々によって分配されることで、多くの機会が直接のここの対話のために提供されるだろうということを望んでいる。資金不足でYMCAの活動が立ち行かなくなっていきかけているところこれらの慰問袋が届いたことにより、YMCAの仕事がなんとか落ちついたので、YMCAの秘書は、この助けに大いに感謝していたと述べた。この写真は数人の友人たちが慰問袋を詰めているのを示している。

この袋を受け取った人のうちの一人でも、袋の中の聖書やキリスト教の話を読むことによって、救い主としてのキリスト教の知識に導かれるならば、YMCAで働いていた人々は、彼らの愛の労働は無駄ではなかったと感じている。聖なる神が種をまき、水を撒き、栄光が実を結ぶ力となるだろう。

“慰めあおう、その道が険しく
足は疲れ、
心が悲しみでいっぱいの時。
だれも気にとめてくれないような時は、
心に重荷を抱えることになって、
みんなこれまでの幸せを半分忘れてしまうから”[4]

J. C.[5]

1910（明治43）年７月

桃山中学校からの報告

今学期のバイブルクラスの平均出席人数は384人である。学校の記録上の在籍生徒数は450人、これ以外に少なくとも30人は病気や他の理由で学校の出席をしていない。これは普通の科目の平均出席率420人中380人以上が朝の

[4]アメリカの詩人Margaret E. Sangster（1838-1912）作。Ralph Waldo Trine（1866-1958）著 *Through the Sunlit Year* にも引用。

[5]本名不明。Mrs. Julia Chapmanか？

バイブルクラスに出席していることを意味する。ここ日本で、私たちは官立学校で聖書を教える問題を解決したのではないだろうか！

私たちの直接のキリスト教の授業は、通学の生徒たちに関する限り、通常時間割のすぐ前か放課後にされる必要がある。通常時間割の前に開かれている10のバイブルクラスのうち７クラスは教師によって指導され、校長、ウッド氏と私が残りの３クラスを担当している。放課後には、ウッド氏と私はキリスト教徒のために志願者の堅信式を、受洗の志願者のため、求道者や他の人のために授業や会合を受け持った。そして先週の日曜日、私たちは学校のチャペルで８人の生徒に受洗させる喜びにあずかった。私は復活教会の牧師森さん[6]より招待され、その晩彼の教会で、もう２人の受洗の喜びがあった。４人以上が牧師に都市での受洗を薦められていた。まだ、たくさんの人達が準備をしている中、その中のいく人かは、次の機会に受洗してくれるだろうと私たちが期待している。

直接の仕事と結果のことはそれだけにしておく。しかしこれが全てではない。生徒たちが成長する前に、クラス（教室）で日々とりあげられている、クリスチャンの真の理想と高潔を我々は信じている。忙しい彼は点を取るために、他人の仕事を示すことは珍しいことではなく、彼が突き止められない限りは、この「交流」に対して平穏でいられるのだろう。昨日、私は、賢い生徒が、たいてい良い生徒なのだが、彼の英作文を適宜に、自身の出来の悪い課題を修正したなまくらな隣人に手渡したことに気付いた。そして、今日、他のクラスで、ある生徒が、英詩の短い１篇を引用することを課された時、彼は注意深く隠されたノートからそれをそのまま読んでいた。終業式で、我々は決まって国家の誉れ、家の誉れ、学校の栄誉について聞くが、この点においては、日本の生徒たちは、英国の生徒たちと比べて評価できる。しかし、個人の誉れの点では、英国の生徒たちの方が模範的だ。一番の日本人の生徒たちはそんなことはしないが、しかし、多くの者は良い点を取るために、いやしい行為やごまかしに屈することをためらわない。日本人の生徒が、国と家の名誉のためにそのような強い感覚を持っているならば、なぜ彼の個人的な名誉に対する考えがそんなに低いのだろうかと尋ねられるかもしれない。

---

[6]長老　森淑次郎　日本聖公會要覧　1910年。

答えは、日本ではどんな種類においても個人主義の精神はほとんどないと言えるかも知れない。ここに、私たちは終始一貫して力強く、私たちのキリスト教の基準と教えを注ぎ、そして生徒が卒業するまでには、彼がクリスチャンであろうがなかろうが、彼に消えないような徴を刻むことができると私たちは信じる。

年の初め、私たちは“Momoyama News”と呼ばれるスクールペーパー（学校便り）を始めた。それは、ワレン氏が“世の光”[7]と呼んでいる発行物の追加として発行された。これらのうち400枚は生徒たちの間で月毎に配布され、中でも学校を去った生徒たちや他の場所に住んでいる者たちは喜んで、このペーパーを受け取っており、私たちが彼らと連絡を取るのに大いに役に立っている。このペーパーは英語と日本語で構成されていて、学校のニュースの記事、英語を勉強する上での豆知識、その月の聖書日課の記録を掲載している。このペーパーのこの部分をウッド先生と私が担当しており、他の部分は日本人の教師や生徒たちが寄稿している。このペーパーは人気が増してきているようで、この学校のキリスト教の風格を示すことと高めること両方の助けになっている。

日本と英国での友達に興味を起こさせるかもしれないので、この月のニュース記事を添付しておく。もし、毎月のペーパーを欲しいと思う人がいるなら、１年の購読料として30銭か12ペニーの切手を学校の私宛に送ってほしい。

♠

３月20日は、休校であった。その日はエドワード王のお葬式であった。クリスチャンの教員と生徒たちは、学校のチャペルで行ったウッド先生と私に司式された短い記念礼拝で会った。その後、学校全体の生徒たちは、グラウンドに集められ、校長は弔意を表し、葬送行進曲が演奏された。

♠

この学期はほとんどの土曜日の午後は戸外でのスポーツにあてている。ある午後は、テニスをし、他には相撲をして、次の週は浜寺で海水浴をする予

---

[7]『世の光』英語名 *THE LIGHT OF THE WORLD* 発行者 C.T. ワレン　発行所　和倫館　毎月20日発行　月刊誌　明治34年創刊　桃山学院史料室に、第37、38、39、116号コピー所蔵。

定である。

♠

バイブルクラスは、よい出席率が続いている。週ごとの平均出席者は、ほぼ400～450人くらいだ。３月30日は抜き打ちの聖書の試験があり、ちょうど常々の他の学校の科目と同じように、解答はすべて良かった。様々な求道者たちのクラスもよく出席されており、６月19日（日）に、神の御意志によって、９人の生徒たちが学校のチャペルで洗礼を受け、そして、６人以上の生徒たちが市内の他の教会で、洗礼を勧められた。

♠

学校が最近受けた栄誉の報告に私たちは、喜んでいる。鹿児島の高等学校は、我々の最もよい卒業生の無試験での入学許可を申し入れてきた。古川杢太郎[8]は、在学期間中に学校の推薦を受けた。日本の270の中学校すべての卒業生の中から64人だけが、このように無試験で高等学校に入学を許されると思うのだが、桃山にその価値があるとみなされる事実が、我々教師たち、生徒たちのすべてにとって、励みとならないはずがない。古川は、彼の善行、たゆみない努力によって学校の栄誉を立派に保つであろうと私たちは信じている。

♠

先の学期の卒業生の中から、高等学校の入学試験を首尾よく受けた者が数名いるのが分かっている、しかし、金が足りないので無理だった者もいる。そんな生徒たちを助けるために創設されるかもしれない小さな奨学金制度の提案が提出された。しかし、今のところ、この問題について、実際には進んでいない。もし何かがこの提案について動きがあれば、この「だより」の読者は耳にすることになるだろう。

♠

私たちはC.E.Tyndale-Biscoe長老[9]という、長年カシミールのスリナガル

---

[8]古川杢太郎　８期生。明治43年３月24日卒業。第七高等學校第三部學（無試験入學）『桃蹊』第七號　明治四十三年十一月に記載あり。

[9]Biscoe, Cecil Earle Tyndale（1863-1949）　1890年C.M.S.によりパンジャブ、シンド、カシミールへ宣教。C.M.S.School（Tyndale Biscoe School）に着任。

にある大きなC.M.S.の学校を預かっていた注目すべき人についての記事を、この「だより」の次の２、３号の目玉記事として発行しようと提案する。この記事は後進国で普及している慣習を示す興味深いことに満ちており、そして、よきものをもたらすキリスト教信仰の力に満ちている。以上のことで、この記事はすべての読者の関心に対する期待を裏切らないと私たちは思う。

♠

望月先生[10]が学校の近く赤十字病院に重篤な病気で入院していることを大変に残念に思っている。先週の土曜日に手術を受けることが必要だった。この手術は、彼を痛みから救ったのであるが、彼は危険な状態が続いている。彼の健康が回復してほしいと切に願っている。

私たちの仲間である望月先生の病気のことを前の段落で話したが、６月13日に亡くなったという残念な報告をしなくてはいけない。望月先生はクリスチャンで葬送式は翌日学校のチャペルで執り行われた。

G. W. ローリングス。

1910年６月25日

" COMFORT-BAGS. "

During the Russo-Japanese war, the word *imonbzikuro* (comfort-bag), was almost a household word among the Christian women of Osaka. Everyone seemed to be busy making or filling these bags which were sent in hundreds to the front.

The Japanese, ever ready to show sympathy, and longing to help and comfort their soldiers, hit upon this plan as conveying most comfort to them in the smallest space.

The bags were made of all sorts of material, the gayer the better, and some took infinite trouble to choose a pattern with flowers, or some suggestion of nature, which would recall to the soldier's mind the country

[10]望月宗一　教員名簿に記載あり。

he had left and for which he was fighting.

The bags contained some of the following articles:—a New Testament, Gospel portions, Christian literature, a letter written by some Christian (these letters often gave the soldiers more pleasure than anything, for they longed for sympathy, being away from all they held dear,) note paper, pencil, handkerchief, tooth powder, soap, patent medicines. Some of those who enclosed letters received answers and thus a correspondence was commenced, and when the war was over an acquaintanceship began which led in some cases to the soldier becoming a Christian. Our little daughter received a grateful answer to the letter she had put in her bag, the man saying that he had heard of the "true way" and was learning more about it.

Naturally when the war was over the bag-sending stopped, all need for them having apparently ceased. However, some months afterwards, an appeal was made at- a Y. M. C. A. concert for some sort of comfort to be sent to the soldiers in the hospitals in Manchuria. These soldiers had stayed there to guard the railway, and were chiefly suffering from the effects of the intense cold.

The foreign ladies in Osaka united in an effort to supply the seven hospitals in Manchuria with a hundred comfort-bags each, that being the average number of in-patients. The Bible Society made a grant of 700 New Testaments, and as these bags were to be distributed by the Y. M. C. A. workers, one hopes that many an opportunity will be offered for straight personal talks. The Y. M. C. A. secretary said they were most grateful for this help, as the bags came at a time when there was a lull in their work through lack of funds. The picture shows a few friends filling some of the bags.

The workers feel that their labour of love will not have been in vain, if even one of the recipients of these bags is led to a knowledge of Christ as his Saviour through reading the New Testament or Christian literature contained in his bag. May God the Holy Spirit water the seed thus sown

that it may bring forth fruit to his glory.

" Comfort one another, for the way is often dreary,
And the feet are often weary,
And the heart is very sad ....
There is a heavy burden bearing
When it seems that none are caring,
And we half forget that we were ever glad."

J. C.

Japan Quarterly July 1910

NOTES FROM MOMOYAMA BOYS' SCHOOL.

This term the average voluntary attendance at the School Bible classes has been 384. The number of students on the school books is 450, but out these at least 30 are prevented from attending school through illness or some other cause. This means that out of an average attendance for the ordinary school lessons of 420, more than 380 boys voluntarily attend the morning Bible classes. So that here in Japan we may feel that we have solved the problem of Bible Teaching in Government Schools!

Our direct Christian teaching, as far as the Day boys are concerned, has to be done either immediately before, or immediately after, school hours. Seven of the ten general Scripture classes held before school are conducted by Form Masters, while the Principal, Mr. Woodd and I are responsible for the other three. After school Mr. Woodd and I hold classes or meetings for Christians, for Confirmation Candidates, for Candidates for Baptism, for Enquirers and others; and on Sunday morning last we had the pleasure of baptizing eight boys in the school chapel and I was invited by Mr. Mori, the Pastor of the Church of the Resurrection, to baptize two more at his Church, in the evening. Four more have been recommended to

Pastors in the city for baptism, while many more are being prepared some of whom we hope will be baptized next term.

So much for direct work and direct results; but this is not all. We believe the Christian ideals of truth and righteousness which we are daily upholding in the class rooms before the boys are bearing fruit. It not infrequently happens that a boy in the rush to get marks will shew up another's work, and so long as he is not found out feels quite comfortable about the transaction. Only yesterday I found that a clever boy, — usually a good boy — had handed his English composition to his dull neighbour who had corrected his own weak production accordingly; and again to-day in another class a boy, while supposed to be reciting a short piece of English prose, was really reading it from a carefully concealed notebook. On speech days we invariably hear a great deal about National honour, the honour of the house, the honour of the school, and on these points the Japanese student compares favourably with the English boy. But or this point of *personal* honour, the English boy has a better standard. The best Japanese boys are above such things, but quite a large number have no scruple about stooping to meanness and deceit in order to get marks. It may be asked, if the Japanese boy has such a strong sense of national and family honour, why are his ideas of personal honour so low? The answer may lie in the fact that there is little individualistic spirit of any kind in Japan. Here, we can consistently and forcibly apply our Christian standards and teaching, and we believe that by the time a boy leaves the school, whether he is a Christian or not, these are indelibly stamped upon him.

At the beginning of the year we started a school paper which is called the "Momoyama News" and is issued as a supplement to the paper published by Mr. Warren called the "The Light of the world." Four hundred copies of these papers are thus month by month circulated among the Students. Those students who have left the School and are living in other place gladly take in this paper and it greatly helps us to

keep in touch with them. The paper is partly in English and partly in Japanese, and contains a column of school news, hints on the study of English, and column of Notes on the Church Lessons for the month. For this part of the paper Mr. Woodd and I are responsible, and other matter is contributed by the Japanese Masters and boys. The paper seems to be growing popular, and helps both to reveal and to further the Christian tone of the School.

I append the News column for this month, which may interest friends in Japan and in England. If anyone would like to have a copy of the paper sent monthly please send 30 sen, or 12 penny stamps to me at the school which will be the subscription for one year.

**"Momoyama News."**

The school was closed on May 20th, the day of King Edward's funeral. The Christian masters and students met in the School Chapel for a short Memorial Service which was conducted by Mr. Woodd and me. Afterwards the whole school assembled in the Playground, where the Principal gave a sympathetic address, and "The Dead March in Saul" was played.

♠

During this term most of the Saturday afternoons are being given up to outdoor sports. One afternoon was devoted to tennis, another to *sumō*, (wrestling) and next week we hope to have some swimming at Hamadera.

♠

The Bible classes continue to be well attended. There is an average attendance week by week of nearly 400 out of 450 boys. On May 30th an unexpected Scripture Examination was held, just as is the custom with the other school subjects, and the answers were on the whole good. The various enquirer's classes are well attend too, and on Sunday, June 19th nine boys D.V.[11], will receive Holy Baptism in the School Chapel and six

[11]原文　…nine boys D.V.,　Deō volente（神の望み、神の御意志）

more recommended for Baptism at other churches in the city.

♠

We are glad to report an honour which the school has recently received. The Kagoshima Higher School has offered to admit our best graduate without an Entrance Examination, and Furukawa Mokutaro has been received on these terms on the recommendation of the school. I believe only 64 students from among all the graduates of the 270 Middle Schools of Japan are admitted to Higher Schools in this way without examination, and the fact that Momoyama has been counted worthy should be encouragement to all of us – masters and students. We believe Furukawa, by his good conduct and steady work, will worthily maintain the honour of the school.

♠

I understand that from among our graduates of last term there are several who could successfully take the Higher School Entrance Examination, but are unable through lack of means. The suggestion has been put forward that small scholarships might be founded to help such students, but so far nothing has been actually done in the matter. If anything comes of the suggestion, readers of the *Dayori* shall hear.

♠

We propose to print in the next two or three issues of the *Dayori* a striking article by a remarkable man, the Rev. C. F. Tyndale-Biscoe, M.A., who has been for many years in charge of a large C. M. S. School at Srinagar in Kashmir. The article is so full of interest as revealing the customs which prevail in backward country, and of the power of Christianity to work changes for good, that we think it cannot fail to be of interest to every reader.

♠

We very much regret to say that Mr. Mochizuki is lying dangerously ill in the Red Cross Hospital near the school. It became necessary, on Saturday last, to perform an operation upon him. This gave him some

relief from pain but his condition continues to be dangerous. We earnestly pray that he may be fully restored to health."

I regret to say that our fellow teacher Mr. Mochizuki, whose illness is spoken of in the last paragraph, died on June 13. Mr. Mochizuki was Christian and Funeral service was conducted in the school chapel the next day.

G. W. RAWLINGS.

June 25th, 1910.